

生徒の未来へつなげる校内別室の活用について



不登校生徒の状況

対象生徒は、1年生の途中から体調不良で欠席が増加した。教室ではなく校内別室に登校している。校内別室で自分を見つめ直し、次第に自分ができることから取り組むようになった。行事にも参加を希望するようになっていく。本年度は運動会や移動教室に参加し、徐々に教室復帰もできている。

具体的な取組

○多様な学びの確保

- ・オンライン授業、学習アプリを通して学習の機会を提供した。
- ・支援員が本人の「学びたい」意欲を実現できるように声を掛けて学びに向かう支援をした。
- ・教室で試験を受けることが難しい場合には、校内別室で受験できるようにした。

○個に応じた支援

- ・校内別室の使用方法を安心安全な場所へと確立させることで、登校回数が増加し、テストも参加し、学習にも自ら取り組むことができた。
- ・学習機会の確保や心理面のケアを充実することで、当該生徒が行事に参加することや取り組めることが増えた。

○教育支援委員会の充実

- ・校内別室ややむを得ず登校できない生徒の現状を共有してSCやSSWから専門的な支援方法の助言を受けて実践した。
- ・手だてや効果が見えにくい生徒に対して委員会で議論し、様々な支援方法や手だてを共有した。

○安心な居場所づくり

- ・年3回のアンケートを実施した。
- ・長期休業明けは「ふれあい月間」として、学校職員（SC含む）と生徒が不安や悩みを話す二者面談を実施した。
- ・トラブルなどで急に教室へ入れなくなった際には校内別室を一時的に利用可能とした。

成果

- ・「不登校は悪いことではない」「必ずしも教室だけが学ぶ場ではない」という考えを全教職員が理解して支援に向かうことで、生徒の現状やニーズに沿った対応や支援をすることができた。

課題

- ・有効的な手だてや寄り添う支援をして、当該生徒の「学びたい」意欲を「学べる場」へと結び付ける。

不登校児童・生徒の支援について



不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学時には通常通り登校していたが、2学期に入り欠席が目立つようになった。保護者は仕事が忙しく、食事はコンビニの弁当やインスタント食品が多かった。全く食べない日もあり、小学校5年生から体重も減っていた。

具体的な取組

○生活リズムの改善

「睡眠・朝食管理表」を毎日記入するようにして、食事・睡眠・学習・ゲーム等について振り返り、改善目標を設定できるようにした。

生活や家庭状況を聞き取り、課題を整理し、当該生徒がすることと家族がすべきことを明確にして、生活を見直すようにした。

○給食による食育指導

別室登校当初は給食を食べたくないと言っていたが、食生活の大切さを指導し、給食は常に準備していた。すると、2か月後に一人で食べると言い、さらに、2か月後には支援員と一緒に食べることができるようになった。

○自己有用感の醸成

目標達成シートを活用して「メンタル・スキル・健康・生活」のバランスを認識できるようにした。学校と家庭とで行う奉仕活動を一緒に決めて実践した。

○コミュニケーション能力の向上

自分の思いを伝えられるように支援員が毎日コミュニケーショントレーニングを行った。自分の思いを話すように促したり、時事問題を話題に取り上げたりして、他者とのスムーズな対話をできるようにした。

○学習意欲の向上

勉強したいものを1つ決めて、1冊のワークを中心に学習した。また、英語検定に挑戦し、対策学習を進め合格できた。

成果

別室指導を行った結果、欠席日数が減少した。また、進級とともに遅刻しながらも教室に入れるようになっていった。現在は教室に復帰することができている。

健康面でも、身長・体重が年齢相当まで増加した。

課題

教室復帰を果たしたが、復帰後も遅刻が多いため、生活改善を継続して行う。

このような支援を実現する支援員の配置があるとなおよい。

不登校だった生徒が、別室登校できるようになった対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、7月に他校から転入してきた中学校2年生である。前籍校では不登校であったが、転校を機に教室復帰させたいという保護者の強い希望があった。転入直後は教室に入れていたが、1か月ほどで教室での集団生活に耐えられなくなったため、別室登校を開始した。

具体的な取組

○校内別室での指導

校内別室指導支援員1人、学習ボランティア1人の体制で校内別室での指導を開始した。

保護者と一緒に登校し、支援員等と一緒に学習を行っている。



○生活指導部会における情報共有

週1回定期で行われている生活指導部会に、SC・SSWも出席した上で、校内別室での生徒の様子や指導内容、課題について共有し、支援方法の見直しや課題解決について検討している。

○支援シートの作成

①これまでに利用した、あるいは支援を受けていた関係機関、②本人の様子、③本人の意向、④保護者の意向、⑤対応について記載した支援シートを作成した。

保護者にも内容を確認してもらった上で、学年や生活指導部会で共有した。

○個に合った指導と他の生徒との関わり

不登校期間が長く、学習内容の理解が進んでいないことが多く、担任と支援員で小学校の内容を確認した上で、学習用タブレットのドリルを活用した反復学習に取り組んでいる。

また、同世代の子ども同士の関わりに慣れるため、休み時間にはボードゲーム等でコミュニケーションを図る機会を設定した。

成果

別室が少人数体制で落ち着いて過ごせるため、平均して週3日程度は登校できるようになった。また、別室利用の生徒同士でコミュニケーションをとることで、人との関わりへの苦手意識を改善することができた。

課題

それまで学習習慣がほとんどなかったため、課題への取組が進まないことがあり、学習意欲を向上させる工夫が必要である。

不登校加配教員の取組について



不登校生徒の状況

対象生徒は、家庭の事情で2学期から転校してきた。前向きに取り組む生徒であるが、友達との些細なトラブルで教室に入ることができなくなってしまった。日によって1時間ほど教室に入ることができる日もある。また、自己嫌悪に陥ることがある。

具体的な取組

○校内体制の強化

校舎は棟が二つあり、正門も二つあるため、他の生徒と会いたくない生徒は別の正門から安心して登校できるようにした。日常的には使用しないPTA室を校内別室として活用し、個別の学習ができるようパーティションで仕切った。

○組織力の向上

校内別室指導員が配置にされ2年目になるが、校内別室が別棟になるために、生徒の登校や下校の確認の連絡体制が課題であった。加配教員が中心となり、教員、校内別室指導支援員と「不登校支援委員会」の中で連絡体制の確立ができスムーズな運営が可能になった。

○個々の不登校生徒への支援

1～3時間目は学習の時間、4時間目はコミュニケーションの時間とした。

静かに学習したい生徒、他の生徒と関わりをもちたい生徒など生徒によって様々であるため、校内別室独自の時間設定をして、個々への支援を充実させた。

○実践の成果についての普及・啓発

定期的に実施される、加配教員連絡会や不登校対応コーディネーター連絡協議会で、本校の取組について情報交換をして進めている。

他校のより良い取組の中で、本校の実情に合うものを取り入れて個々のニーズに答えながらブラッシュアップを進めている。

成果

2年間かけて本校の校内別室の運営体制が確立されてきた。課題が出る度に加配教員が中心になり、それぞれの立場で意見交換をし課題解決できたことは、個別のニーズに答えたとともに、組織的対応の充実にもつなげることができた。

課題

教員が日常の業務に追われ校内別室指導支援員に任せる比重が大きくなると、落ち着いた校内別室の運営ができなくなるために、定期的な共有が必要である。

不登校加配終了後を見据えた学校全体での不登校支援

不登校生徒の状況

対象生徒は、1年生の後半から教室に入れなくなり、校内別室への通室を始めた。学期ごとの面談で本人と家庭の希望を確認し、校内別室では会話とコミュニケーションの練習を、学習サポート教室では教科の補充を行った。現在は2学年に進級し、教科を選んで教室で授業に参加したり、職業体験に参加したりしながら、当該生徒の願いである教室復帰を目指している。

具体的な取組

○魅力ある学校づくりの推進

「発達支持的生徒指導の理解と実践」を研究テーマとし、改めて目指す学校像を見直した。「保護者目線で書く自己紹介」「弱みを見せる先生クイズ」などの活動から、自己表現と他者理解を意識できる学級・教科指導を実施した。

○別室指導支援員と協力した別室運営

教員が別室で教科授業を行う際、個別対応を担当するために、支援員を2人程度配置した。これにより、異年齢の生徒が集まる別室で教員が余裕をもって生徒対応ができるようになった。

○校内研修の企画、運営

不登校生徒の心身の安定と自立に向け、専門家を招いて音楽鑑賞と調理実習を行った。教員向けには心理士を招いて発達検査の読み取り方研修を行った。

○組織体制の構築

不登校対応担当や特別支援担当を中心に、不登校の背景を意識した支援を行った。個別支援シートを活用し、見通しをもった支援計画を立てることで、全教員が共通認識をもって生徒対応に当たった。



成果

別室運営を不登校加配や特定の教員に頼らず、学校全体で行える体制の基盤を整えた。

また、増える傾向にある特別な教育的ニーズを抱える生徒に対して、教育相談を積極的に行った。医療等の専門機関につながることで登校習慣が回復した例もある。

課題

教育相談を含めた生徒対応には中心となる教員が必要である。居場所として校内別室が機能した一方、支援が行き届かないこともある。

不登校対応に係る様々な取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、年度途中から学習の遅れが原因で教室に入りづらくなった。1か月半ほど校内別室での支援を行ったが、教室には入れなかった。そこで、校内別室と教育支援センターの併用による対応に切り替えたところ、現在は校内別室にも教育支援センターにも通うことができている。学習に対する意欲も向上し、成果を感じられるようになっている。

具体的な取組

○対話週間

困り感のある生徒が、相談したい先生をカード（下図参照）に記入して面談を行う「対話週間」を年に5回設定している。新たな不登校につながらないよう悩みの早期発見・早期解消に努めている。

回	月 日 (曜日)	相談の 教員	相談を 希望する 先生	備 考
1	6月24日 (月)	有・無	先生	
2	9月 9日 (月)	有・無	先生	
3	11月25日 (月)	有・無	先生	
4	1月14日 (月)	有・無	先生	
5	3月 3日 (月)	有・無	先生	

○校内別室

教室には入れないが、校内別室であれば登校できるという不登校生徒のために校内別室を設け、持参した課題に取り組んでいる。校内別室指導支援員2人が教員と連携し支援している。



○不登校対応表

各担任が、不登校や不登校傾向の生徒への家庭連絡や面談等を不登校対応表（下図参照）に随時記録している。連絡をこまめに行い、学校と家庭が連携して不登校生徒の支援をしている。

1年●組 不登校対応表【9月】									
電話17:30○		電話17:30×		家庭訪問16:30○		訪問16:30×		生徒が来校して面談	
家庭訪問してポストにグーポスト18:30						サポート教室につなげる… 教室へ			
日	曜日	●	●	●	氏名	対応	●	氏名	対応
1	金					電話12:00○			
2	土								
3	日								
4	月					電話12:00○			

○不登校対応委員会

週1回、不登校対応委員会を開催している。管理職、不登校加配教員、各学年の代表、養護教諭、SCを構成員とし、各担当から、気になる生徒や不登校生徒の情報を報告し、対応策を検討している。校内別室利用希望届についても利用日時、学習内容等について協議し、議事録は、全教員に共有している。

成果

不登校だった生徒や教室に入れず欠席しがちだった生徒7人が、別室登校により定期的に学校に来られるようになり、文化祭を参観したり、実技教科や体験学習に参加したりできるようになった。登校することで規則正しい生活の一助にもなっている。

課題

別室登校や外部機関とのつながりのない生徒をSSWへ依頼するなど、専門職と協力して支援していくことが今後の課題である。